

藤原宮第37次（西面中門）発掘調査

現地説明会資料

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1983年11月12日

はじめに

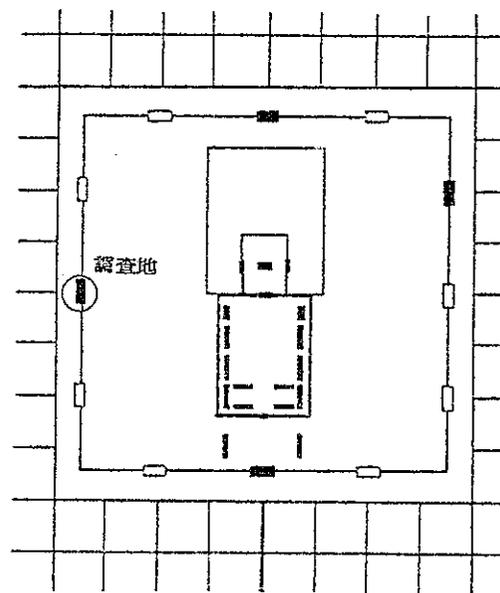
奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部は、藤原宮西面中門の位置・規模および西面大垣と、この外側にある西面外濠の確認を目的として橿原市縄手町で第37次調査を行なった。調査地は橿原市立鴨公小学校の北西の水田で、大極殿の西約500mにあたる。調査面積は1008㎡である。

検出遺構

検出した主な遺構は、西面中門SB01、西面大垣SA02、西面外濠SD03、しがらみSX04、井戸SE05・06・07などである。

（1）西面大垣SA02 宮の西面を区画する掘立柱塼の大垣で、西面中門推定位置の南側で4間分、10.64mを検出した。柱掘形は一辺1.5mの方形で、柱間は2.66m(9尺)等間であり、これまでの調査で確認されている柱間と等しい。うち柱痕跡が認められるものが2つあり、直径は43cmである。掘立柱塼のとぎれている北側が門にあたる。宮の中軸線は今回検出した大垣北端柱穴の北15.2mの位置にある。この距離を北に折り返すと、南北長30.4mとなり、これまで明らかにしてきた宮城門と同じ桁行5間(総長25.2m)、柱間17尺(5.02m)の平面規模を持つ門がこの間に存在したと考えられる。

（2）西面中門SB01 門の遺構は、後世の著しい削平のため、基壇などの痕



藤原宮第37次調査 調査位置図

跡はとどめていなかった。しかし、門に使用されていた礎石および唐居敷を発見した。この両石はいずれも門に据えられた原位置にはなく、唐居敷は外濠がまだ水路として機能していた時期(9~10世紀)に外濠に落とし込まれ、礎石は外濠が埋まった後(13世紀初頭)に、水田耕作の障害になったためか土壌を掘って落とし込まれていた。礎石は長さ120cm、幅120cm、厚さ約80cmであり、平坦に加工した上面の一端に唐居敷と組み合わせるための方形の仕口をうがち、その脇に軸摺り穴の半分を掘りくぼめている。唐居敷(からいしき)は長さ146cm、幅130cm、厚さ40cmで、片側に蹴放し(けはなし、長さ146cm、幅30cm、高さ10cm)を、その一端に礎石と組み合わせるための断面逆台形の突出部(長さ24cm、上面幅30cm、下面幅23cm、厚さ28cm)を造り出している。この先端は柱の円弧に合わせた凹面(復原直径67cm)となっており、上面には方立(ほうだて)の枿穴(長さ13cm、幅10cm、深さ4cm)がある。方立枿穴のある部分の蹴放し脇下面には軸摺り穴(復原直径24cm、深さ15cm)の半分を掘りくぼめている。礎石および唐居敷はいずれも花崗岩である。

今回出土した礎石と唐居敷はその軸摺り穴の位置からみて直接には組み合わないが、同様の仕口を持つ礎石と唐居敷とを組み合わせ使用されたことは明らかであり、このような唐居敷はこれまで例がない。西面中門の中央3間に扉がつき、この扉は内開きであると考えられるので、礎石は3つの扉のうち、右扉口の右側の柱に据えられていたことになる。また唐居敷の位置は不明であるが、検出位置からするとやはり同じ右扉口の左側の礎石と組み合う可能性が高い。

（3）西面外濠SD03 西面中門・大垣の西方の南北大溝であり、総長25mを検出した。濠の幅は現状で12m、深さ1.5mである。西面外濠は宮の廃絶後も水路として機能しており、東岸が大きく崩れ、当初の濠の幅よりかなり広がっている。この濠の上・中層の堆積土は粘質土であり、この土層中から10世紀頃の遺物が出土した。また、下層の堆積土はバラス混り砂であり、この砂層中から8~9世紀の遺物が多量に出土した。濠中央で南北方向に設けられたシガラミSX04を下層で検出した。

（4）井戸SE05・06・07 井戸3基はいずれも外濠に近接した位置に設置されている。SE05は方形の井戸である。井戸枠は横板組み3段で、一辺80cm、

深さ72cmほどある。井戸底には小石を敷いている。井戸中からは9世紀末の土師器小皿・黒色土器小壺と貞観永宝が出土した。SE06は、井戸枠として下段に曲物、上段に土釜を据えている。井戸中から10世紀後半頃の黒色土器椀が出土した。SE07は井戸枠として下段に円形曲物（直径36cm）、上段に楕円形曲物（38cm×52cm）を据えている。井戸中から削り掛けやヒョウタンが出土した。

出土遺物

西面外濠から多量の土器類・瓦埴類の他に木製品・金属製品・銭貨・木簡が出土した。

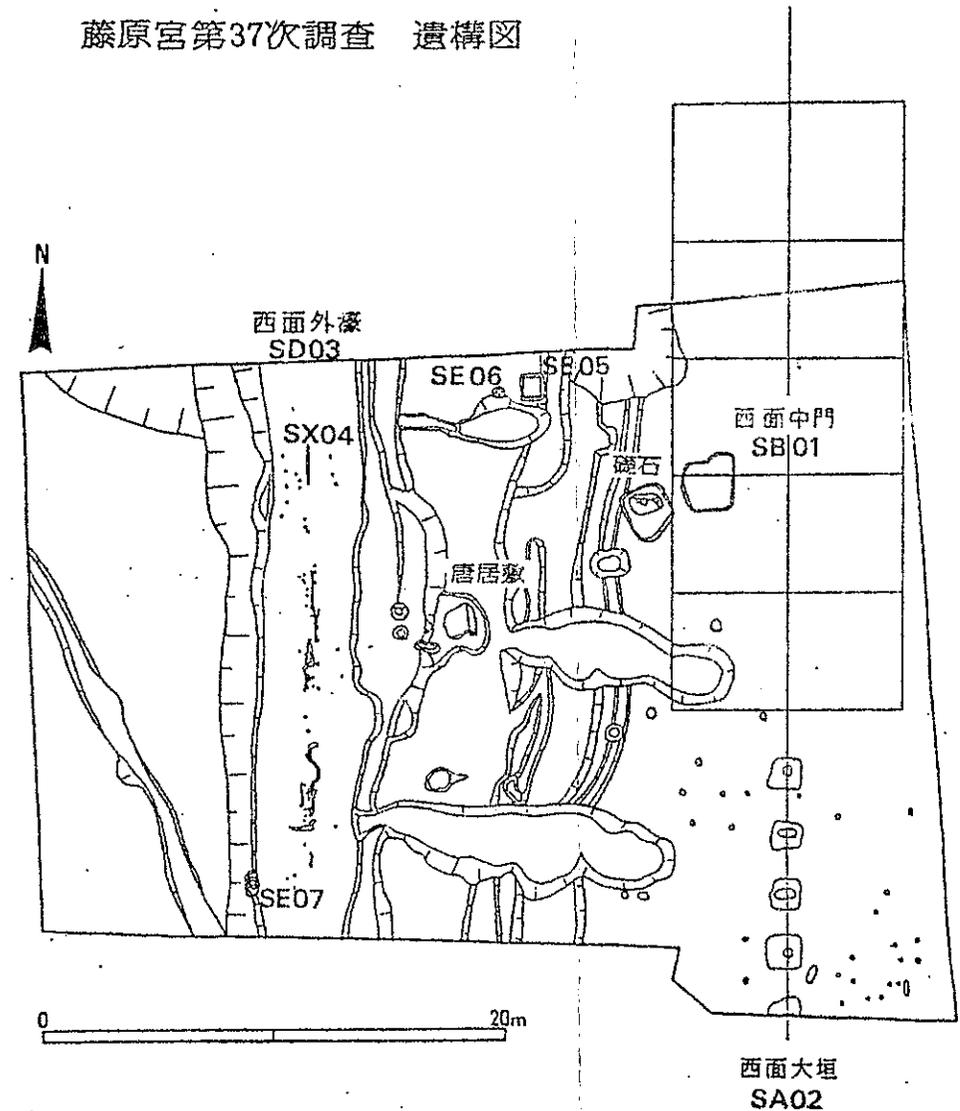
土器は8世紀前半のものが多く、次いで9～10世紀のものである。墨書土器の中には「宮」「三合」「下」「末」「中」「南口」「蔵」と記されているものがある。この他、緑釉の耳皿・蓋、土馬がある。瓦は藤原宮式のものが多いが、奈良時代の瓦も少量ある。木製品には削り掛け、机等がある。銭貨は和同開珎3点、神功開宝1点、隆平永宝1点、富寿神宝1点、饒益神宝1点である。木簡は2点あり、1点は人名の一部が記されているが、他の1点は判読不能である。

まとめ

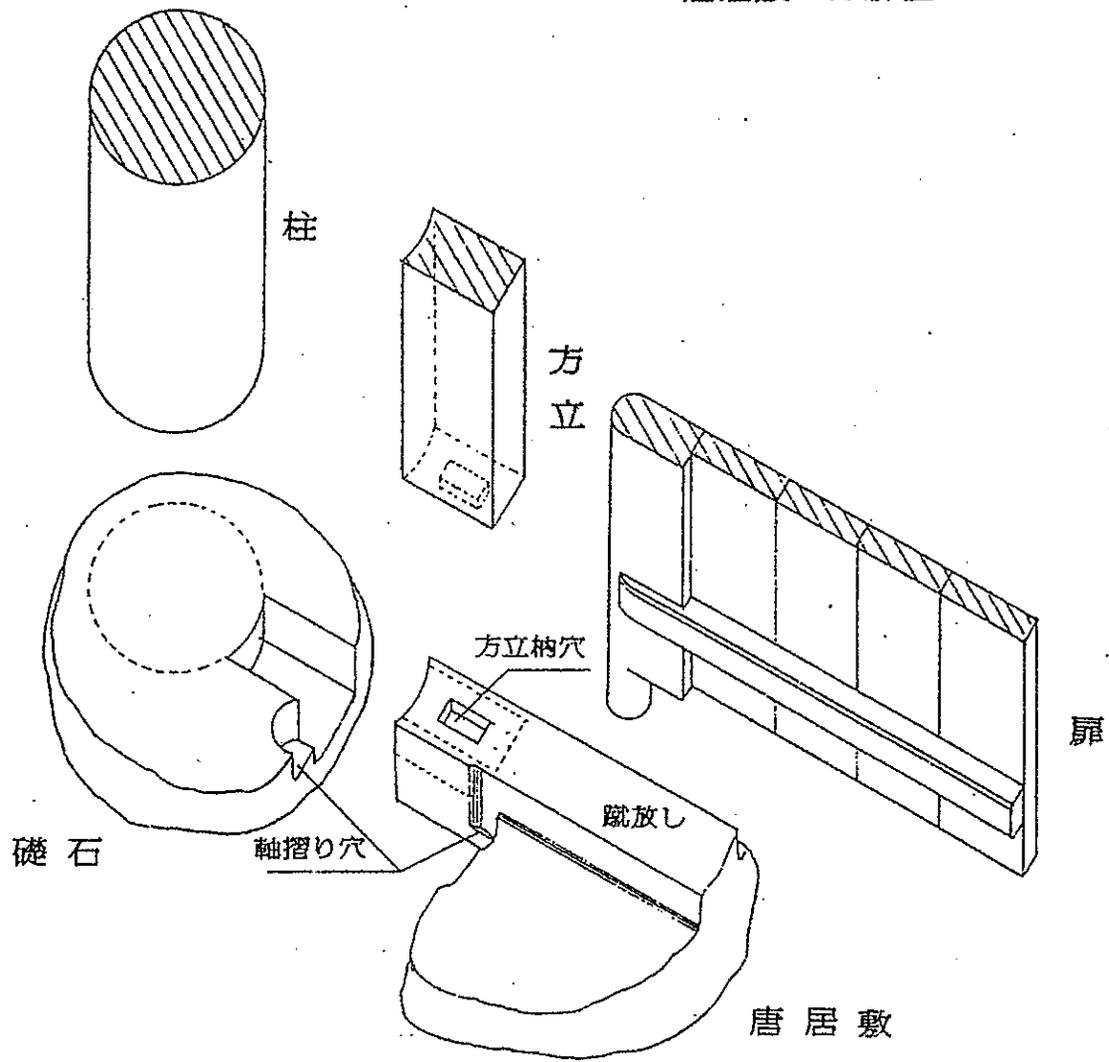
今回の調査によって、西面中門基壇等の確認はできなかったが、大垣の位置から門の存在が明らかになり、これまで検出した宮城門（南面中門・北面中門・東面北門）の規模（総長25.1mで桁行5間、柱間は5.02mで17尺）と同じであることが判明した。さらにこの門に使用されていた組み合わせの唐居敷と礎石を発見したことによって、宮城門の構造復原に貴重な資料を得ることができた。

藤原宮廃絶後については、西面外濠が10世紀末頃まで用水路として機能しており、近辺に井戸が掘られ、人々の生活の場となっていたが、11世紀頃には埋没してしまい、これ以後この周辺は水田となったと思われる、その時点では濠に代わる新たな水路が作られたであろうと推測される。

藤原宮第37次調査 遺構図



藤原宮西面中門 礎石・唐居敷 分解図



藤原宮西面中門 礎石・唐居敷 復原図

